

# 近代日本における中国観

## —漢学者を中心に—

長崎大学大学院 生産科学研究科

陳 華

中国は日本文化の源泉地として長い間不動の地位を保っている。特に江戸時代になると、儒教を官学とし、中期には古学の勃興と国学の興隆によって、内部から批判的思潮も生じたが、おおむね漢学は基本的文化的価値とみなされてきた。日本人にとって、中国という国は文化の規範だったのである。ところが、17世紀から、日本はオランダとの接触によって、次第に西洋の近代文明に触れ、蘭学者を中心に、西洋文化と東洋文化が比較されることにより、中国文化への再認識が始まった。

本論文では、幕末から明治・大正にかけての漢学者に着目し、近代日本における中国観について五章に分けて検討する。

序章では、研究課題と方法について述べている。

第一章では、まず幕末の西洋一辺倒の時流の中で、開国論者である横井小楠と佐久間象山に着目し、彼らの「開国論」の角度から、それぞれの文明観を明らかにする。次に、安井息軒と塩谷宕陰をはじめとする昌平黌の漢学者がどのように西洋文明を捉えたのかについて、それぞれの代表作である『弁妄』と『六芸論』を取り上げ、その内容を考察した。その結果、(1) 小楠の文明観は究極の根拠を「仁」に置き、その内容は、国内では民衆が豊かで平和な生活を送り、国際社会では各国が仁義に基づいて交流し、平和な秩序を保っているというものであった。小楠は「仁」の思想に基礎づけられた普遍的文明観に立ち、その実現を目指して西洋文明、特に西洋の社会政治制度や思想を導入することを提言した。

(2) 象山の文明観は究極の根拠を「技芸」に置き、その内容は、西洋科学技術及び教育制度の導入によって、日本は国力が増強し、知力や学力、軍事力の面で西洋を圧倒できるようになり、一国の独立を保つことが実現できるというものであった。(3) 塩谷宕陰が、本来の学問のあり方が経典中心の学ではなく、実践の学であるから、技芸の学としての西欧の医学や科学知識の習得も必要であり、これは儒教の教えに反するものではないという主張を『六芸論』に託し、彼の東西文明を折衷する態度を導いた。(4) 安井息軒が『弁妄』を通して、キリスト教の妄誕不稽を批判し、間接的に西洋文明を排斥する態度を導いた。

第二章では、明治初期から大正にかける日本知識人による中国旅行記（竹添井井の『棧雲峡雨日記』、岡鹿門の『観光紀游』、内藤湖南の『燕山楚水』、芥川龍之介の『支那游記』）を考察し、当時の知識人の目に映った中国像を究明した。その結果、(1) 竹添の紀行文の基調は中国への好意的な見方であり、政治的にも中国に対する希望を捨ててはいない。(2) 岡はヨーロッパと中国の間であって、ヨーロッパを取り、中国を捨てるという意識を紀行文の中で示している。(3) 内藤にはヨーロッパ・コンプレックスはなく、ただ日本がある

のみであり、日本にとって重要であるという意味で、中国が存在しているにすぎないという主張が紀行文の中に表れる。(4) 芥川は竹添のように古典の追体験をしながら、当時の日本が政治、経済、軍事において中国を侵す野心をよく見極め、それに反対する姿勢を紀行文の行間に滲みこませている。一見中国へ軽蔑があらわれた作品と思われるが、その奥に作家の中国への深い愛着が潜んでいることを読み取れる。

第三章では、明治後期の漢学復興期を機に出版された漢籍叢書——『漢文大系』、『漢籍国字解全書』、『日本倫理彙編』を中心に、近代日本における叢書出版の角度から日本漢学界の学問の推移を考察した。その結果、(1) 叢書『漢文大系』は漢文体の原典原注主義を重んずるに対し、『漢籍国字解全書』は漢文の国字解つまり口語訳を重視する。また、『漢文大系』と『漢籍国字解全書』の共通点は、いずれも日中両国の学問の成果をよく見極め、一方に偏向しないアカデミックさを感じさせる。特に、『漢籍国字解全書』は、中国古典の国字化、いわば漢学と国学との融和そのものであり、漢学の日本化に大きな役割を果たしたといえる。(2) 一方で、井上哲次郎・蟹江義丸による『日本倫理彙編』は、日本伝統的な道徳を回復させるために編纂された。その方法として、東洋の「道徳」と西洋の「道徳」に人間の生きる規範の共通するところを取り、日本の道徳主義の根底にすることである。『漢籍国字解全書』の出版は日本的文化意識の萌芽を意味し、『日本倫理彙編』の刊行によって日本的文化意識が形成されたということを導いた。

終章では、論文全体の総括及び今後の展望について述べている。

本論文の結論として、近代日本における中国観は、日本人のアイデンティティーに関する問題で、日本が自己認識を形成する過程を語っている。近代世界における日本は、自身を東西文明を最良の形で融合させ、再構築させたと考えている。